

東國名所圖會

鹿島記  
中

ル 4  
3726  
2



鹿嶋志中の巻

神官小倭仗平時

鄰撰  
本間三庫

○午頭天皇 樓門の左にあり祭神素戔鳴尊十二月初午日の

夜祭礼より神前門松を立注連繩を練舞毎年神衣を奉る

俗に御召 老女の清浄なるは錦をめて縫いしる神衣を

持やく祢宜は逢時の必疫病の恐ありと云此夜戸を閉く門

外に出るゆれまゝ午頭天皇といへる佛書よりいへる名也

○熊野神社 同所あり伊弉並尊事解男速玉男の三神

を祭まゝ

○御厨神社 厨村あり御食津神を祭まゝ五穀を司

とる神をれを厨村に祭るなるへ厨のりと庵屋より黒屋乃

義大神の御饌に關るよと云く厨といへる

○稻荷神社 銚場あり祭神食稻魂命

早稲田 大塚 田舎  
25.7.5  
蔵 赤

○八龍神 拜殿の殿二社、樓門の中、體町の左右二社をへり

龍神を八所へ祭れり八龍神といふ社のこと神道集よもり  
せり龍神を閻洪加美閻御津羽の神とて伊弉諾尊如具土  
神を斬りし時御刀の手上に集る血手候より漏出て成ま  
せり神なり武甕本大神といふ御兄弟の神は地をせり

○七夕神社 熱田社ともいふ奥馬場あり祭神素戔鳴尊稻

田姫神體の胃根女根といふ石像なり

○潮神社 十町許東より祭神熊野高倉下神武紀も武甕

雷神對曰雖予不行而下予平國之劍將自平矣天照大神  
曰謬時武甕雷神登謂高倉下曰予劍曰都靈今當置汝庫  
裏且取而獻之天孫高倉下曰唯々而寤之明且依夢中教  
聞庫視之果有落劍倒立於庫底板即取以進とありより板

宮しる名げけしとやと立綱法師といふ此社を俗に見目明神告神といふ

言うところ按よ古事記より降此刀狀者穿高倉下之倉頂  
自其墮入故阿佐采余玖汝取持獻天神御子とありし阿  
佐采余玖を朝目吉るしを朝宮といひんを阿志の及伊

なれを朝宮といふなりや阿志の及伊の例に冠辞考の余よ

○跡宮 神野村あり物忌の居宅のかまへ祭る社也

夫木集 光俊

みえより跡をたしとて跡のくさしれ代も神をひよる同書  
よこれ歌を鹿島社は跡宮と申社大明神のともりて天とど  
らせり

○鷲神社 神野村の入口あり祭神天日鷲命也。

○海邊神社 同所あり祭神蛭川社海邊よりありぬちか、

あけけの神代紀は伊特丹尊蛭兒を生多し三歳まで足た  
たざりたれを天磐據樟船に載て風の隨放棄らりしありしを  
海邊しとくしや。

○祝詞神社 西六町許あり祭神太玉命。按て天照大神天

の岩戸は隠しし時天兒屋振命太玉命二柱相共計り  
く御幣と奉祝詞のれせしと。古事記神代紀より  
相通りし祝詞の名をやはせし。

○押手神社 同トゆりあり。旧記は光仁天皇寶龜九年

神印を納られし時大宮司大采やみく正殿に入奉り  
と平城天皇大同二年正月十五日正殿鳴動して御戸開

けく神託に依大宮司清持都のゆりし朝廷は奏す帝甚

御感ありて勅は今より後鹿島の神職任符を以て補任し  
任符は此神印を押でしと任符の案を給ふ。今に至り任符と  
清持もかとも帰郷し別は社と造く神印を納む是と押手

社とのみ云國史よりさうし沙汰されしとれど社に神印とり  
ゆれを賜りしとの有しや。香取神宮は押手社あり和訓系

も鎌倉の押手社もえ。雍州府志は賀茂の靈壘社もあ。外の  
ゆもかほりしと。神手は天武紀は符の字とあり古の朱墨と手掌は塗て押し信  
の哥は神代より天の押の勅  
を免るしよたてし岩屋山も

○あけけの神社 下生村あり祭神高麗關雷す一名津  
東西社ともいふ津の宮とよく大船津とちりて野也。

吳竹集

常陸の山に山都く鹿嶋の國師氏集より流の神といふ 詞師氏集より流の神といふ 風土記より年別七月造舟而奉納津宮といわりて昔空穂舟を造りて七月十一日の夜それを内海へ流せば鹿嶋の津宮より香取の津宮につれりといへり此の條より御船祭の條より今一 法師の津東西の鹿島の船津と香取の船津とをさしりていひしるす其津水上三里許に對しる東西今鹿嶋の方の大船津とよぶと香取の津宮といふと説よくあるれり俗に彼方此方といふ 曰説しる所の社と道の左右ありりる津東西といへり近世合せ祭といふといふ方角といふ

○國主神社

烟原といへりそのより祭神大己貴命あり國

造りしを大神を國主といふと云ふ

○羊神社

宮下村にあり祭神大羊神此よりいふと云ふ神田

何處かあり

○道路衢神

五町許南の山路に有俗に山の端に道路衢神とい

く祭神猿田彦命神代紀に有一神居天八達之衢云敢問之衢神對曰聞天照大神之子今當降行故奉迎相待吾名是猿田彦大神云和名抄に道神と和名太無乃加美道上祭云里人れ旅路にのりて此神に禮を竹簡よしと又藁履ひと手向く道の平安を祈り古風の存れ

○阿津神社

七町許南にあり祭神活津彦根命阿津の活津

の訛をいふといふ

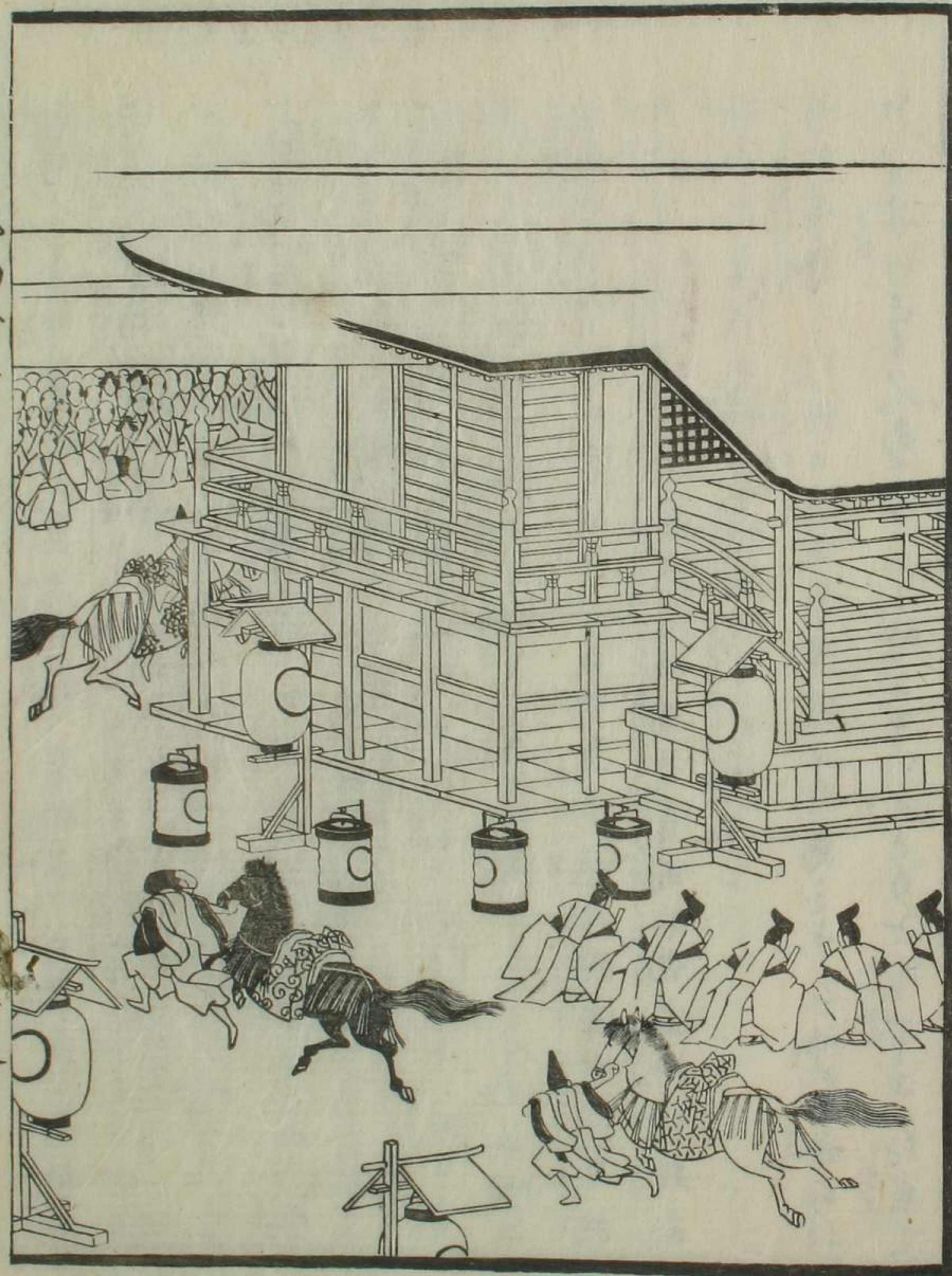


今あるところの甲冑は後世奉納のものなり。その年号など離はけ  
あはれなり。まづてもなり。

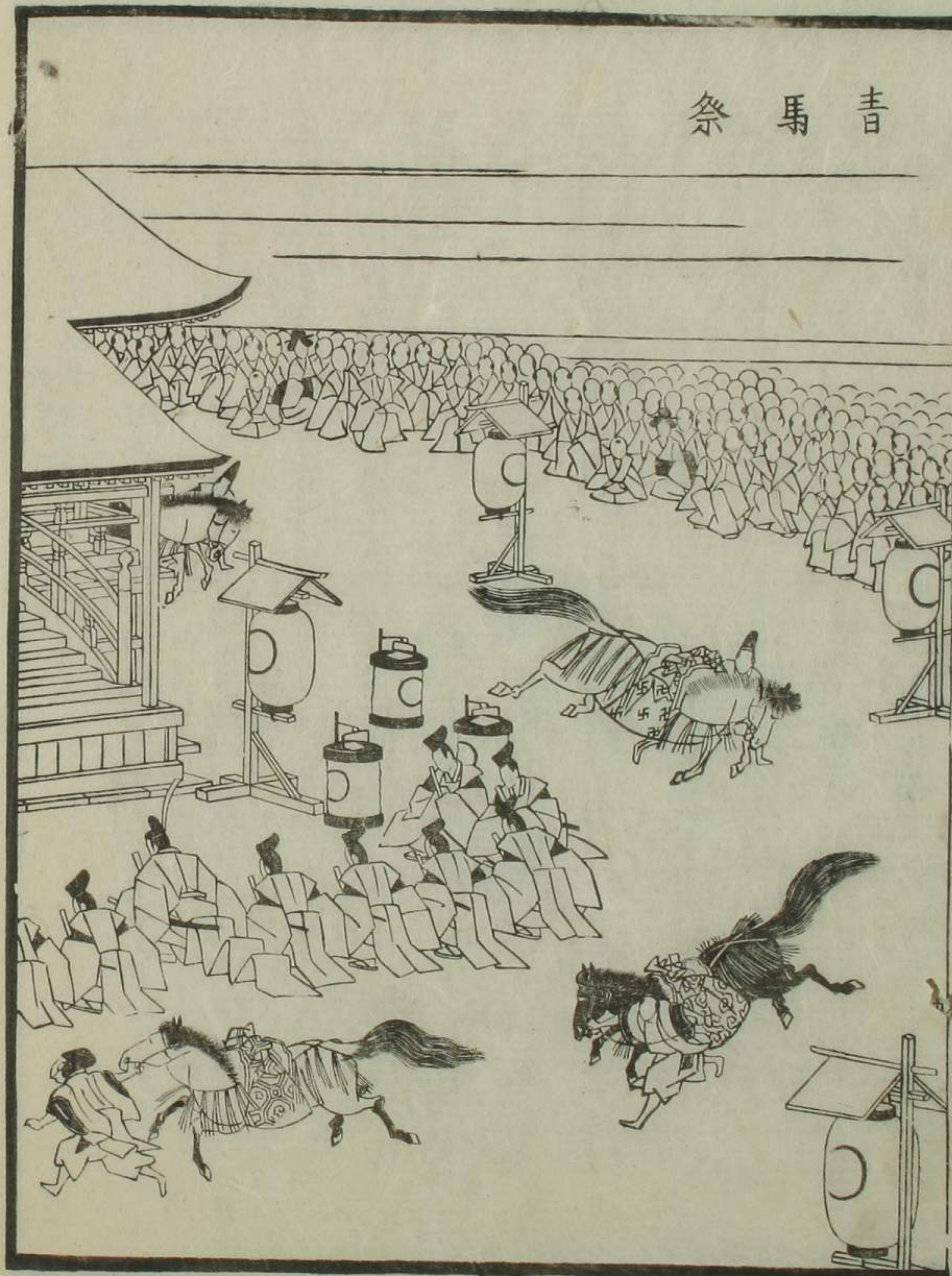
○御兒神社 三代實録に貞觀八年正月廿日。常陸國鹿島  
神宮司言大神之苗裔神三十八社在陸奥國古先云。延曆  
以往訓大神封物奉幣彼諸神社弘仁而還絶而不幸由是  
諸神為宗物惟寔繁嘉祥元年請當國移狀奉幣向彼而陸  
奥國稱無舊例不聽入閔官司等於閔外河邊被弄幣物而  
歸自後神崇不止境内早疫望請下知彼國聽出入閔奉幣  
諸社以解神怒其幣断用大神封物云。神名帳陸奥の条に鹿  
嶋御兒神社七座あり。延曆元年五月陸奥の鹿島の社に敷九等封二枚奉  
風土記行方郡にも香島神子之社と云々あり。  
上の件の撰社末社と其ありまゝとあり。まづと云々あり八十末社あり

祭らるるも例年四月土月

○歳山祭 正月四日正殿の四方に神木の推木あり。その年乃  
明の方にあつたる推の本より筒と焼き木筒を劔の形に造  
りて木筒の真中に十吉合と三字を刻け。右の筒は推の枝を  
折て筒の焼火をくせり。さうして後大官司家の明の方の  
軒に指あてり。これ昔の御占祭の式の残りなり。御占祭は其  
の吉凶を卜合へ朝廷は奏聞し。さうして此趣を卜車に用ふる  
天葉若木の也。よるまゝ下巻ト部家の条に云々あり。  
○青馬祭 正月七日の夜正殿の御戸を開き奉りて祭礼あり。  
御戸開の神事と云々。物忌典の錢切をさう散米して奉りて  
神殿よりさう太刀弓矢何れの幣帛を奉りて。去年納めしを  
を取出さすと云々。物忌出納の役と云々。大官司をさうして諸神官



書馬祭





神拜も。其の畢りぬれども。青馬節會として神馬七疋曳として御假殿  
 の四面を走廻らせり。俗諺は朔日より今宵まで大神御眠神まつりして上古  
 の四面を走廻らせり。御鎮と称し鳴物と停止せしめて此夜御目癒ことひらけり  
 この祭は勅使参向ありしに延長年中より故ありて止られし  
 とぞ。青馬を禁中の節會に。禁中の儀式はあざな祭事との外  
 ありし。或説は後堀川院御宇征夷大將軍藤原賴経御惡来王を征伐のち關東御下向  
 の時祈禱とて靈驗と蒙りしより四時の祭禁中の儀とて行なれりしとて  
 傳りし由記に云くこれに馬を陽の歎し青と春の色なり。年の始は青  
 馬をこれに年中の邪氣を除くと公事根源は是とて河海抄に  
 光仁天皇寶龜六年正月七日。天皇御揚梅院安殿設宴於  
 五位以上已而内既宴進青御馬是青馬始也。云。続後紀に  
 承和元年戊午御豐樂殿觀青馬云。  
 常陸帶祭 俊頼口傳に常陸國は鹿島と云き神を祭られ  
 る日。女けりし人あきとありし時。その名どのを布帶より集て

神の御前より。その中より。男の名を。帯のおのび  
 か。取。祢宜が得させし。女見。さ。と  
 男の名あり。帯を。御前より。帯の。奥義抄に。帯と  
 それを。男か。親。奥義抄に。帯と  
 の。帯。我名。男の名。帯と  
 彼神の御前より。帯を折。中。祢宜  
 は結。離。結  
 帯の。九。結。この  
 純。常陸。宮の中。結  
 注連。開。神宮寺。ありし  
 近世寶倉に納。俗説は神功皇后御懐胎の時の。正月十四日祭。この日  
 御腹帯を納。神宮寺に持。祢宜祝。堂内。列座



これ等の奇事等の故事よりてよめり

○踏歌祭 正月十四日。祢宜祝等梅花の枝と手毎よりち大鼓をうち笛とあは。笏拍手をあは。御假殿を三度うち廻り各神拜の式あり。花の時ら花とりて神と祭る。神代紀の伊弉册尊の神去より条よる。踏歌と天武紀。七年正月丙午漢人等奏踏歌これ踏歌の始。日本紀。私記曰今俗曰阿良礼走師説此歌曲之終必重祢。万年阿良礼。今改曰万歳樂是古語之遺也。

○司召祭 正月十五日。惣神官の職位の次第をかた記し。鉦場よあはく。東よ向ひ高らうよ讀あづらう。それとこの祭近せよ。祭る。

○北星祭 三月廿二日の夜。拜殿は机をかまき。北星は御饌を

踏歌祭



供ふこの夜宮殿のうち御燈を燃さくことごとく天地もかや  
 かりし是と万燈會とよ万燈もいと佛事よものきりごと  
 て續日本紀も天平十六年十二月同十八年十月金鐘寺すこ  
 朱雀路のどよ万燈と燃されしことごとく

○流鏑馬

五月五日稔の御供例の如くをりし流鏑馬也。此日神  
 御菜をりし弓矢携るる武士あまの行列し。次は白丁等神馬と  
 曳次は鞍馬五疋は射手の人々おのく赤乗つ。次は弓と定て鳥居  
 の前より町中と競走りし帯るる矢と取りて弓おしり射的を  
 射ゆくとも賀茂の競馬といく。射手は四月晦日より参籠し  
 神官等馬上あらし輿のりて忌垣のりしひくく。日記も天  
 慶のむり平貞盛勅宣と蒙りし相馬將門誅伐のりし發向  
 のりし祈願より事故なく討亡し。かつ奇瑞と現りしき。

○名越技

六月晦日の夕。茅をて龍蛇の形と輪より大宮司  
 宜毎年役しりしきりし。

かゝるは始られし祭し。瑞驗記も藤原秀郷神宮も二十日  
 参籠ありし。畢る日正殿鳴動し木綿と晒せしが如き白気  
 未申の方靡き。又將門滅亡の前日鹿ども群居て鳴きし。鹿  
 たりし。此祭も例年惣大行事の下知し。惣大行  
 事も政幹の子孫也。東鑑も治承五年三月十二日。御教神之  
 餘於宮中為不令現狼藉以鹿嶋三郎政幹被定補當社惣  
 追補使也。惣追補使むらち。流鏑馬とよ。天武天皇の馬  
 起し。この日大宮司大祓宜より八少女二人と出せりし。神  
 前より。御田植の神事也。又土月廿八  
 日の夜流鏑馬あり。樺門の外馬場とありし。溝口村の二人の祓  
 宜毎年役しりしきりし。



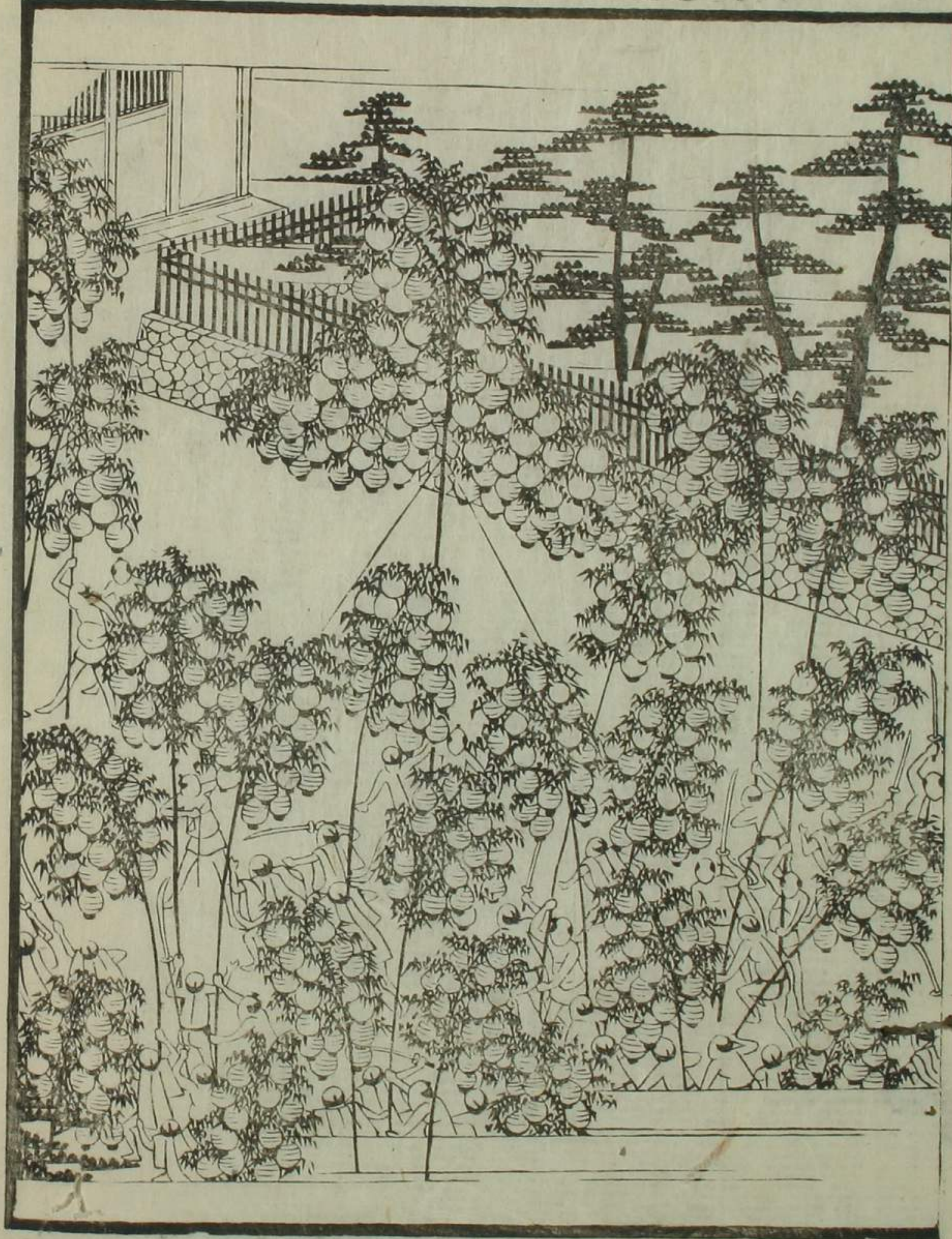
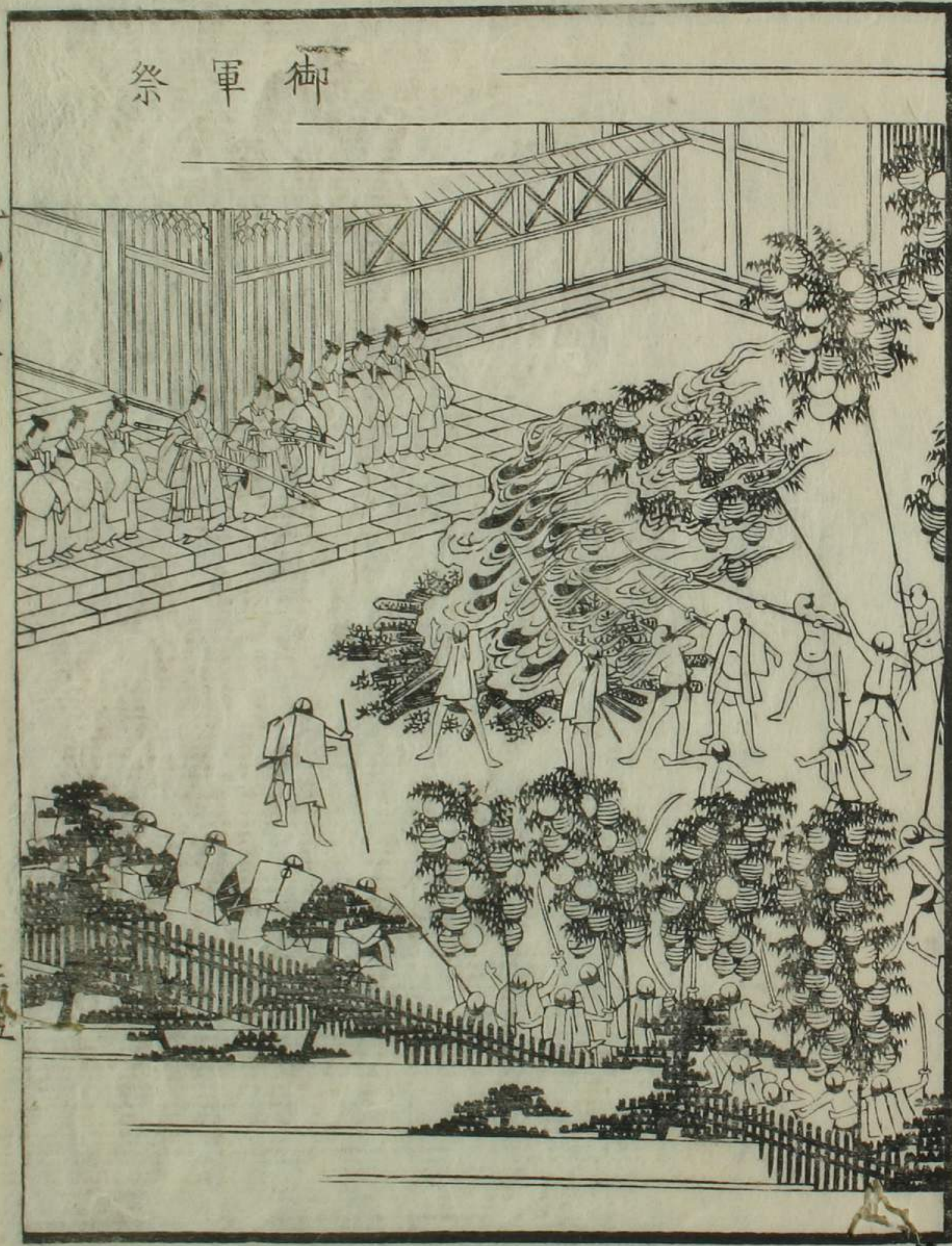
茅の横刀と持東に向ひしちりかしの茅の輪と左足よく越  
めく三度その時中臣の太祝詞事と宣うる。庭下の荒蕪  
を敷塩とせし。昔に諸神官内海は出く板しきりといふ  
今の大宮司家よりこの式とす。成瀬川は出てみせせり。

○御軍祭 七月十日の夜、祓宜神主樓門の前より立列あり。其時  
神戸の民町々の者群集し。青竹の葉は火としりし。小挑燈を  
幾つとも結附し。手毎よりも。鯨波の声とあげ。推寄  
来りし。籬をちりして一時は焼あけし。いひおびる。きこ  
でし。大宮司大祓宜の大小の神劔とちりし。捧ぐ。神官よ  
り里人よ至るまで。男も太刀劔とちりし。女も鎗長刀の鞘とち  
りし。籬の火影はあざざら。此はちんちん。挑燈町と  
いひ。挑燈の市を賣て物まると。旧記  
よ。神功皇后三韓征伐のちり。大神御行ま。王船と助守

多ひ平らう。順和とらう。帰陣あり。應神天皇の御宇より  
此祭を行ひ来り。由あり。俗に三韓退治の籬とす。大神の  
助守あり。詞林采葉抄藻塩草。神功紀は。皇后の御船と冥助あり。王船を  
宇佐八幡縁起大平記あり。諸神の御名と問せし。答曰。幡菰穗出吾也。於尾田吾田  
蘇之淡郡所居神之有也。云。神名帳は。阿波國阿波郡建布  
都神社あり。思ひ合ふ。東鑑は。八田右衛門尉知家と鹿島  
造管奉行とせし。條に。来七月十日祭以前早可終成風之  
功之旨被仰言云。

○御船祭 七月十日の夜。風土記に。年別七月造舟而奉納  
津宮古老曰。倭武天皇世。天之大神宣中臣臣狹山命。今社  
御舟者。臣狹山命答曰。謹承大命。無敢所辞。天之大神。朕爽  
復宣汝舟者。置海中。舟主仍見在岡上。又宣汝舟者。置岡上。

御軍祭



舟主因求更在海中如此之事已非二三爰則懼惶新造舟  
 三隻各長二丈余初獻之中臣臣狹山命り例傳記云三社乃御  
 船の上は假屋神輿と造構三社の御舟と云神宮色々の織と飾注連と  
 引三艘の舟と云く繩を解内海へ流し津の東西と云未社此  
 前より軍と云の異国退治悦の鯨波を奉御船と云の波  
 の上は浮奉る下総国香取神宮の本社津宮と云諸人  
 カの棹もささむおづろ神風はさうせ御舟と著御座と云此  
 いややより廢れんと猶其式の文和三年は記する御舟祭祝料雜物の奉  
 見しんば船流し御舟の装束より何れの事かの形と九木より三艘造り樓門八龍神  
 の御前空徳舟とは備へ空徳舟の義しそのちより神劔楯板と云く神寶の武  
 具と飾りし諸神官列座をお祈宜一人進み出く行軍時  
 と呼ぶ同唯々と答て退座。

○新嘗祭 八月初五日拜殿の前仁智門の左右は机とすうけ  
 其年の初稻の御饌と醴酒と献奉る是と新嘗と云此日家  
 子も藁人形とほりて高間原へ送りて逐く神戸の民あけ集り  
 名主と鞍馬の旗とて大鼓と町き高間原の鬼とかせと  
 雜りあはし是古風の遺也天照大神新嘗まことめと云  
 素戔嗚尊惡事と云くより贖物と云たりと底国へ追下  
 へりてと神代紀に云。

○相撲 九月九日の夜銚場はあけく箒となれ神宝の廣緋を  
 持りて箒をかざりし神代紀に云く神官等それを  
 巡りて拜ま次は祈宜神の面と冠と云く神前のかさに向ひ舞  
 う。面は二枚と云く一は恐りし面一の美を云く後  
 童子相撲あり童子と云く東西より出く三番づくと云く是を



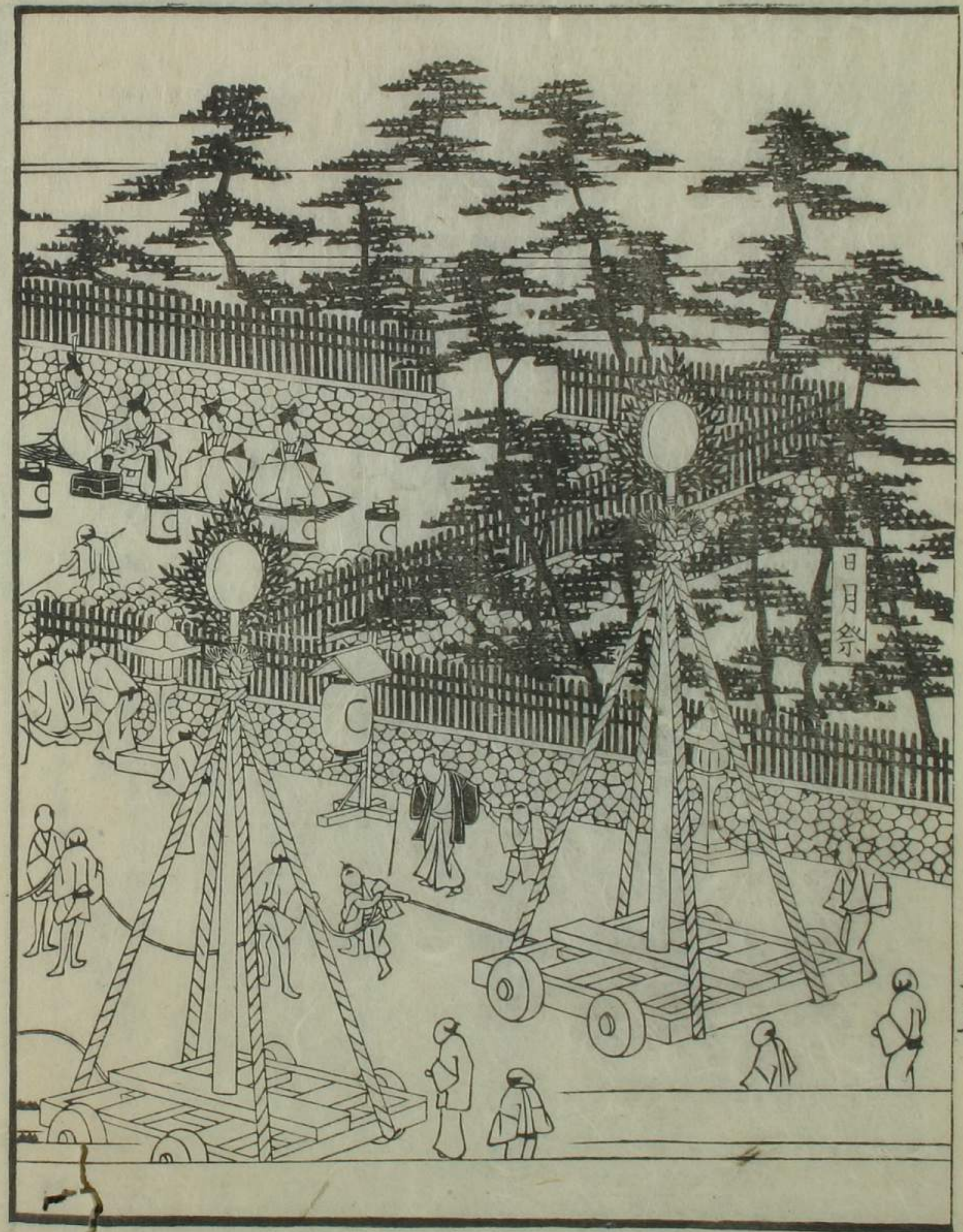
あつてつひとつて。按て万葉は部領使とくあり。其事根源は左右の近衛相撲とて見ゆ。万葉は部領使とて又神龜三年は始て諸國より召せし。寛平七年は童相撲御覽あり。その相撲の事。皇とつては仁天皇の御宇野見宿禰當麻蹶速が故事よりあつた。と。神代より古事記に建御名方神千引石擊手未而來言誰來我國而忍々如此物言然欲為力競故我先欲取其御手故令取其御手者武甕槌大甕槌神の御手即取成立氷亦取成劔又故爾懼而退居爾欲取其建御名方神之手乞歸而取者如取若草搯批而投離者即逃去故追往而追到科野國之洲羽海これ今の諏方神社と云々是れ相撲の事あり。此の祭の傳りぬ。ぬと深きいしれぬ。や。や。町家も毎年この日土俵をかすく相撲あつてつひとつて。○日月祭 同夜うら鳥居のうち馬場の通に左右に高一丈

二尺宛の柱を立て。其上は日月の御像をおののけ。神子結をののけ。の如く飾らむ。柱の四方は大繩と張地車子のせ。町人あまの寄來て樓門まで曳け。日のかゝ先は曳附をよ。若月のうら先はこれを其年雨災ありとす。柱はかゝる大繩は例年大工三人の家より納む。旧記に九月九日日月と日と九陽より多し重陽とす。然るに日月と飾る。この祭と行ふ。雄畧天皇の御世は始むとす。○黒酒白酒祭 風土記に年別四月十日設祭勸酒ト氏種属男女集會積日累夜樂飲歌舞其唱云安良佐賀乃賀味能弥佐気畢多義止伊比祁婆賀母興和我惠比尔祁年。此の新酒か。神脚酒。又釀脚酒。今よこれ日押手社。黒酒。白酒と備へ。祭事あり。畢は祈宜祝等大官司の家。集ひく夜も酒宴あり。小角は團子と盛錢切をあり。

鳥居



鳥居



三十七

かけ土器は豆腐吸物かきと膾を盛ると肴とて黒酒白酒  
 を飲と遊ぶとれ古の遺風とてとて黒酒白酒の大嘗會  
 小の辞とて續日本紀の宣命とて万葉集天平勝宝四年新  
 嘗の哥とて後書 白と常の清酒とて黒と貞觀儀式  
 と焼灰とて延喜式とて入久佐木灰三外とて中比とて  
 黒胡麻とて康富記と醴酒也白者自其色也黒者上聊振鳥  
 麻粉と酒とて酒の古名と醸の約きとて  
 ○ 釵座祭 古事記は大神降に出雲國伊那佐之小濱而按  
 十掬釵逆刺立于浪穂臥坐其釵前問其大國主神言云神代  
 鹿島問答は釵と立と其上は坐と神會と今世は釵  
 御坐と云祭當社はあは是こととて此祭の名は  
 息洲社は傳とて四月十三日の祭と祭の名は神官等海の方

は向ひて拜とて海原の神事とて伊那佐小濱の心とて  
 ○ 庭上御供 大神御供を奉る時おとて庭上はか  
 きい殿内はわとて殿内はとて庭上は  
 の神代紀は皇孫降臨の時天照大神の詔は吾高天原所御齋  
 庭穂亦當御於吾兒とてこの齋庭との多ひが庭  
 上のとて庭上は御供と奉る濫觴とて立綱法師  
 といふれき  
 ○ 直會 樺門の右の忌垣とて一構の処と鉞場とて  
 神事畢と後とて直會ありとて祢宜神主等集會  
 て神前は供奉とて御饌御酒のちとて飲食とて  
 直會ありと後世の直會ありと大嘗祭の時天皇大嘗宮は  
 御と神と祭と御とて大嘗聞食て致齋とて

其儀式畢ひ直會ちくわい豊明とよあけとて豊樂院とよがくゐん致齋ちしやうとてこの式しきあり  
 まへ御酒宴みさけありは是こゝはは大社おほやしろのこの式しきあり  
 歴朝詔詞れきしやうし鮮あま直會ちくわい奈保理なほり阿比あひの切きり直會ちくわいの齋いひとて  
 平常つね復かへ意い續つづ紀き猶良比なほらひとて延喜式えんぎしき續後記つづごきとて直相ちくさう  
 とて書か何なに借字かじ伊勢いせの直會院ちくわいゐん儀式帳ぎしきぢやうとて

○

柵舞さくまい 毎年四月十二日としごとふたにじふににち奥宮おくみや沼尾社ぬまおし坂戸社さかど息洲社いきすまのちあ末社すえ  
 の祭まつりありて畢ひ直會例ちくわいれいの如ごと直會ちくわいの次つぎ柵舞さくまいありとて  
 まへ横笛よこふエとて笏拍子しやくはひとて柵さくの枝えだと挿さ舞まなり。神樂歌かみがらうたは  
 神葉かみはのかんかとては十氏人じゆしじんぞはおちりけとて

ゆかると心をこゝろあぶ  
 上の件かみの祭礼まつりも其そのあふとて記きするのこのまま年中あんがうの例祭れいまつり  
 大神車おほがら百三十三度ひゃくさんじゅうさんど小神車こがら七百餘度ななひゃくじゆどあり。

